

生物と環境におけるヨウ素 2011 <プログラム>

— ヨウ素発見 200 年記念 サテライトシンポジウム* —

開催日： 2011 年 11 月 19 日（土）午前 9 時 30 分～18 時

開催場所： 学習院大学（JR 山手線・目白駅下車） 理学部 南 7 号館 101 教室

参加費： 無料

ヨウ素は今から丁度 200 年前の 1811 年にフランスにおいて海藻から発見されました。この元素は、人の甲状腺の機能にとって重要な役割を果たしていますが、海藻やその他生物においてどのような働きを担っているのか不明な点が多くあります。

ヨウ素の重要な産地はチリと日本であり、2ヶ国で世界の産出量の約 9 割を占めています。前者はチリ硝石、後者は地下の鹹水であり、それらの起源はまだ十分に解明されておりません。また、海洋、大気、土壌などにおけるヨウ素の循環に関しても謎が一杯です。

3 月に起きた福島第 1 原子力発電所の事故では大量の I-131 が環境に放出されました。それ以外にも、核実験や再処理施設の稼働などにより放射性ヨウ素（I-129 や I-131）が環境中に放出されています。それらの環境中での分布や挙動を調べることは環境安全の面からとても大切です。

ここでは、ヨウ素に注目し、その生物や環境に関連した研究成果を持ち寄り、様々な視点から議論するものがあります。また、福島原発事故により放出された放射性ヨウ素の汚染の復元についての最新の話題も含まれます。

村松康行 <yasuyuki.muramatsu@gakushuin.ac.jp> , 天知誠吾 <amachi@faculty.chiba-u.jp>

生物とヨウ素		予定時間	
近藤洋一	群馬大学名誉教授	9:30-10:00	生物に於けるヨウ素利用の進化に関する考察
天知誠吾	千葉大学	10:00-10:30	微生物によるヨウ素の化学形態変化
長瀧重信	長崎大学名誉教授	10:30-11:00	過剰ヨウ素摂取と甲状腺: 福島原発事故の影響を考える基礎として
地球環境とヨウ素			
Martin Reich	Chile 大学 (チリ)	11:10-11:50	Sources and sinks of iodine in the Atacama Desert of northern Chile: geochemical and climatic implications
Glen Snyder	Rice 大学 (米国)	11:50-12:30	I-129 in surface reservoirs: present and future trends
昼休み			
横内陽子	国立環境研究所	13:30-13:50	大気中における有機ヨウ素化合物の動態
村松康行	学習院大学	13:50-14:10	日本周辺における高濃度のヨウ素を含んだ鹹水の産出とその起源
東郷洋子	産業総合研究所	14:10-14:30	化学形態とヨウ素同位体比に基づく幌延地域でのヨウ素の挙動解明
環境中のヨウ素-129			
Rolf Michel	Hannover 大学 (独)	14:30-15:10	I-129 in the European environment
松崎浩之	東京大学	15:20-15:40	Iodine isotope systems in the environment:
遠山知亜紀	学習院大学	15:40-16:00	大気降下物中の I-129 の経年変化
末木啓介	筑波大学	16:00-16:20	福島県東部地域における土壌中の放射性ヨウ素 I-129 の分布: 原発事故の前と後
福島原発で放出された放射性ヨウ素			
鶴田治雄	東京大学	16:30-16:50	福島原発事故による放射性セシウムと放射性ヨウ素の広域環境汚染
木下哲一	清水建設	16:50-17:10	福島県及び関東地方におけるヨウ素-131 の降下量
茅野政道	原子力機構	17:10-17:30	福島第一原子力発電所事故で放出された放射性ヨウ素の大気拡散解析
総合討論		17:30-18:00	・放射性ヨウ素による甲状腺への影響(長瀧) ・ヨウ素 129 を用いた原発起源のヨウ素 131 の推定(村松) ・今後のヨウ素研究について(天知)

*ヨウ素学会シンポジウム (千葉大 11/18) のサテライトシンポジウムとして開催